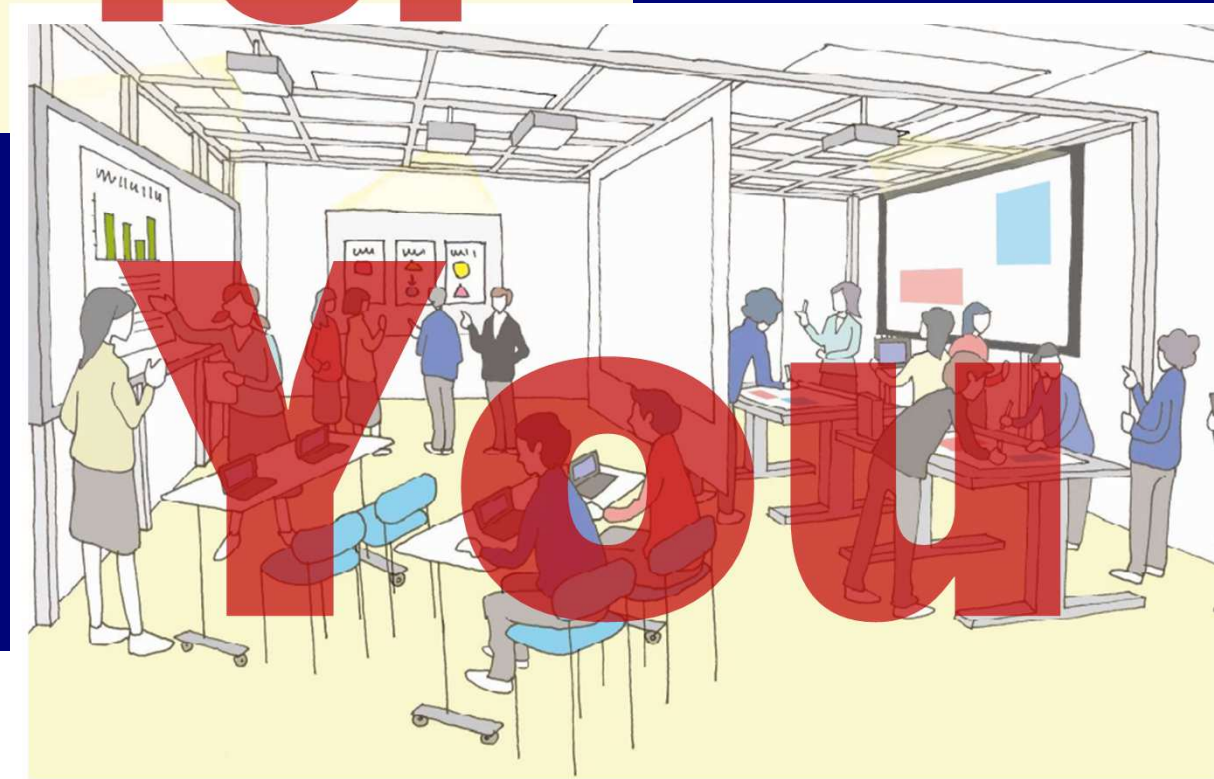


福岡市 教育改革ビジョン
2024 - 2027

「教育」は
何のためにあるのか。
「学校」は
誰のためにあるのか。
めまぐるしく変化する
時代の波に合わせて、
教育の在り方を
考え直すときが来た。

子どもたち一人ひとりの可能性を
最大限引き出し
自分らしく生きていく力を育む
「教育」をめざして

福岡市は、教育改革に本気で取り組みます。



100年以上も前に始まった近代の教育制度。

この国の発展を支えてきた教育が、めまぐるしく移り変わる時代の荒波の中で

今、危機に瀕しています。

ここ福岡市も、その例外ではありません。

5年前に比べて2倍以上に激増した「学校に行けない」「学校に行きたくない」子どもたち。

子どもたちの力になりたいという熱い情熱と重過ぎる業務負担の狭間で苦しむ教師と、
離職や退職、業界離れによって残された教師の負担がさらに増すという絶望のスパイラル…

未来を担う人材を育てるという

この国で最も大事な分野の一つである**教育制度**を立て直すために

今こそ、私たちが変わらなければなりません。

「子どもたちは、一人ひとり違う存在である」
その事実を否定する人はいないでしょう。

好きなことも、一人ひとり違う。

外で友だちと元気にサッカーをするのが好きな子もいれば、
誰にも邪魔されずに本の中の世界に空想をめぐらすことが好きな子だっている。

得意なことも、一人ひとり違う。

聞く人の心を震わす歌声を持つ子もいれば、
見る人を惹きつける芸術的な絵を描く子だっている。

自分に合った学び方も、一人ひとり違う。

友だちと一緒に「ああでもない」「こうでもない」と話し合いながら理解する子もいれば、
教科書を何度も何度も繰り返し読んでじっくり頭に入れる子だっている。

だからこそ、

「一般的な児童」でも「平均的な生徒」でもない、
他でもない「あなた」にとって最適な教育が必要です。

Education for You

そもそも「教育」とは？

「教育」 = Education の語源は、ラテン語の

「educere (エデュケーレ)」または「educare (エデュカーレ)」であると言われています。

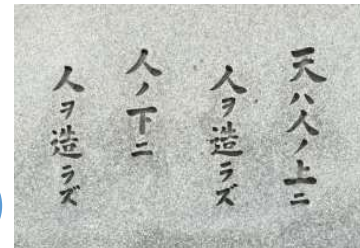
隠れた才能・能力などを引き出す

養いつつ育む

※ 諸説あり



福沢諭吉氏（『学問のすゝめ』の著者。旧一万円札の肖像にもなった偉人）も自著『文明教育論』の中で次のように主張しています。



現代語訳

学校は人に物を教うる所にあらず、ただその天資の発達を妨げずしてよくこれを発育するための具なり。

教育の文字はなほだ穏当ならず、よろしくこれを発育と称すべきなり。

かくの如く学校の本旨はいわゆる教育にあらずして、能力の発育にありとのことをもってこれが標準となし、かえりみて世間に行わるる教育の有様を察するとき、よくこの標準に適して教育の本旨に違たがわざるもの幾何いくばくあるや。我が輩の所見にては我が国教育の仕組はまったくこの旨に違えりといわざるをえず。






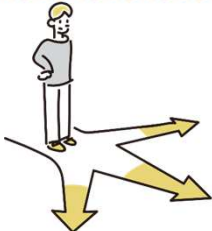

学校は人に物を教えるところではなく、子どもの生まれ持った資質の発達を邪魔せずに発育するためのものである。教育という文字（を訳語とするの）は全く不適當であり、発育と呼ぶべきである。

学校の本来目的は教育ではなく能力の発育であるが、世間で行われている教育の様子を見てみると、その本来目的（＝能力の発育）を違えていないものが一体どれほどあるだろうか（いや、殆どない）。私の考えでは、我が国の教育の仕組みは本来の目的（＝能力の発育）を違えていると言わざるをえない。

なぜ「教育」を変えなければいけないの？

日本が置かれていたその時々時代の背景を踏まえて行われていたこれまでの教育（「全員同じ教育」）は国全体の教育水準の向上に寄与し、その下で活躍した先人のお陰で今日の私たちの生活が成り立っています。

ですから、これまでの教育を頭ごなしに否定するのではなく、**変わりゆく時代の流れに合わせて教育をアップデート**することが、これからの日本を形作っていくために求められているのです。

	19世紀後半～	1931～1945	1945～1954	1955～1973頃	21世紀初頭	今・これから
時代背景	 近代国家づくり 富国強兵	 日中戦争 太平洋戦争	 戦後復興期	 高度経済成長期	 高度情報化 グローバル化	 VUCA時代（※） （将来予測が困難な時代）
求められる力	基本的な能力 （読み書き・計算等）	愛国心 忠誠心 規律正しさ	学ぶべき決められた量の情報を なるべく多く記憶できる力 与えられた問題・課題に対して 正解を導き出す力	情報リテラシー 情報処理能力 多様性の尊重	正解のない問題に対し 問題の所在を考えて 他者と協働し解決の アプローチを探る力	
教育の役割	「平均的な生徒」を想定して定められたカリキュラムに従って 全員同じスピード、同じ方法（学習テーマ・教材など）により 学ぶべき決められた量の情報を生徒に伝達する（教え込む）				教育の役割も  大きく変化	子ども一人ひとりの 主体的に学び続ける力や 学ぶ意欲を育む

（※）VUCAとは「Volatility：変動性」「Uncertainty：不確実性」「Complexity：複雑性」「Ambiguity：曖昧性」の頭文字をとった言葉

なぜ「公立学校の教育」を変えなければいけないの？

福岡市

全国



学校の数

令和5年5月1日時点

福岡市		全国	
国公立	私立	国公立	私立
147校 (98.0%)	3校 (2.0%)	18,736校 (98.7%)	244校 (1.3%)
小学校	小学校	小学校	小学校
71校 (85.5%)	12校 (14.5%)	9,163校 (92.1%)	781校 (7.9%)
中学校	中学校	中学校	中学校

【出典】「令和5年度教育統計年報」（福岡市教育委員会）／「令和5年度学校基本統計」（文部科学省）

全国同様、福岡市も圧倒的に公立の学校が多い



家庭の経済状況に左右されず、一人ひとりに合った質の高い教育を全ての子どもたちが受けられるようにするためには、圧倒的多数を占める国公立学校の教育を変えなければいけません

子どもの学習費

1年間・子ども一人あたりの費用
(学校教育費・学校給食費・学校外活動費)

国公立



私立

約35万円

小学校

約167万円

約54万円

中学校

約144万円

【出典】「令和3年度子供の学習費調査」（文部科学省）

現行の教育制度の「問題点」とは？

01 一人ひとり異なる教育ニーズに応えられない画一的な「全員一斉授業」



02 学校で学ぶ意義や目的を実感し難くさせる将来や実社会との希薄な繋がり

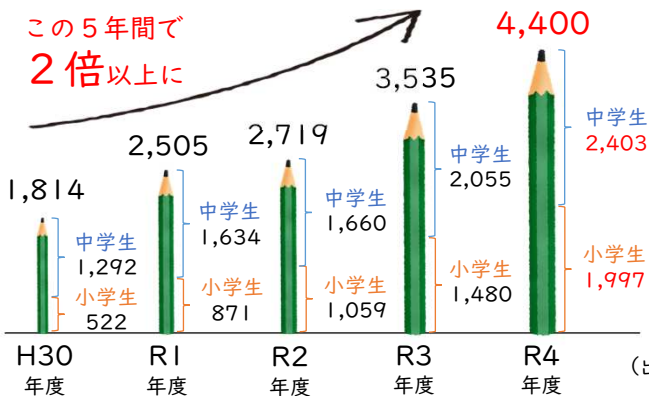
学校での勉強が「次の学校に入るための知識を覚えること」になってしまっているケースが多い

学校での学びが「自分の将来や実社会と繋がっている」という実感を抱きづらく、学校に行く（学校で学ぶ）意義を見出せない



03 「学校に行けない」「学校に行きたくない」中で悩み苦しむ子どもたちの増加

福岡市の不登校児童生徒の数



不登校児童生徒（アンケート回答者）のうち

5割以上が勉強面で悩みを抱え、
6割以上が今のクラスに通いたいと思っています

（出典）福岡市教育委員会が行った不登校児童生徒等へのアンケート調査結果（令和5年）

04 「子どもたちのため」という大義名分のもとで限界に達した教員の業務負担

社会構造の変化等に伴って学校・教員に対する多様なニーズの高まりが顕著に

授業（準備を含む）以外の業務（保護者対応等）負担が増大



心身ともに限界を迎えた教員の離職・退職が進む

負のスパイラル

残された教員の負担がますます重くなる

福岡市の4つの改革プラン

01 「全員同じ教育」（全員一斉授業）から「個別最適化教育」へ

施策 自分に合った方法で学ぶスタイルへの転換

01 子ども一人ひとりの興味・関心等に応じ、意欲を高め、好きな方法で学びを深めるスタイルへと転換します

施策 評価制度やカリキュラムの見直し

02 「人と比べる評価」から「一人ひとりを伸ばす評価」へと評価制度を改め、カリキュラムも見直します

施策 柔軟で創造的な学習空間づくり

03 「楽しく」「深く」学べる学習空間を構築するため、教室空間だけでなく学校全体のデザインも刷新します

03 悩みを抱える子どもを誰一人取り残さない学ぶための「居場所」づくり

施策 それぞれの子どもの状況に応じた多様な支援

01 学校に戻すことを目的とするのではなく、それぞれの状況（子ども・保護者の意思を含む家庭の状況等）に応じたきめ細かで多様な支援策を展開します

施策 学びの多様化学校（不登校特例校）の設置

02 不登校児童生徒の状況を踏まえた弾力的な教育課程を採用した「学びの多様化学校」を設置します

02 自分の将来や実社会と繋がる実感を伴う“リアルな学び”の充実

施策 “自分事としての学び”の充実

01 自分のやっていることに意味があると感じられる学びを日常的な学びの中に積極的に取り入れます

施策 “自分の将来に繋がる学び”の充実

02 一人ひとりが自分の望むように生きていくために必要な知識・技能を身につける学びの時間を設けます

施策 “実社会と繋がる学び”の充実

03 地域人材をはじめとする実社会の多様な資源（ヒト・モノ）と学校を結びつけるシステムを構築します

04 目の前の子ども一人ひとりの「伴走者」として教員が力を発揮できる環境整備

施策 教師が担う業務の徹底的な整理・適正化

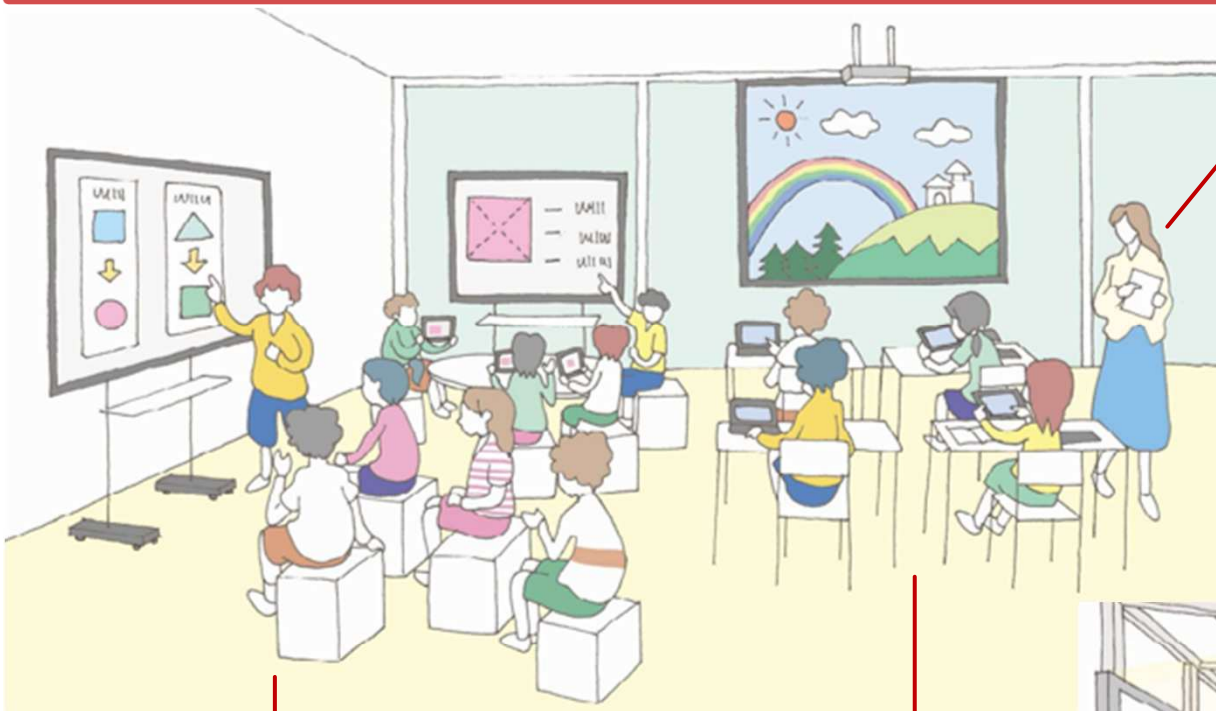
01 教員が担う業務全体の洗い出しと整理、適正化を行うことにより、目の前の子ども一人ひとりに向き合う時間や授業・教材の研究等を行う時間を確保します

施策 教員の資質・能力の向上・活性化

02 教員サポートチームを設置して個別最適な支援を行うとともに教員同士が研鑽し合える環境を整備します 08

01 「全員同じ教育」から「個別最適化教育」へ

施策 01 自分に合った方法で学ぶスタイルへの転換



教師の役割

チョーク&トーク Style

教科書の板書や説明を通じて一斉授業を行う

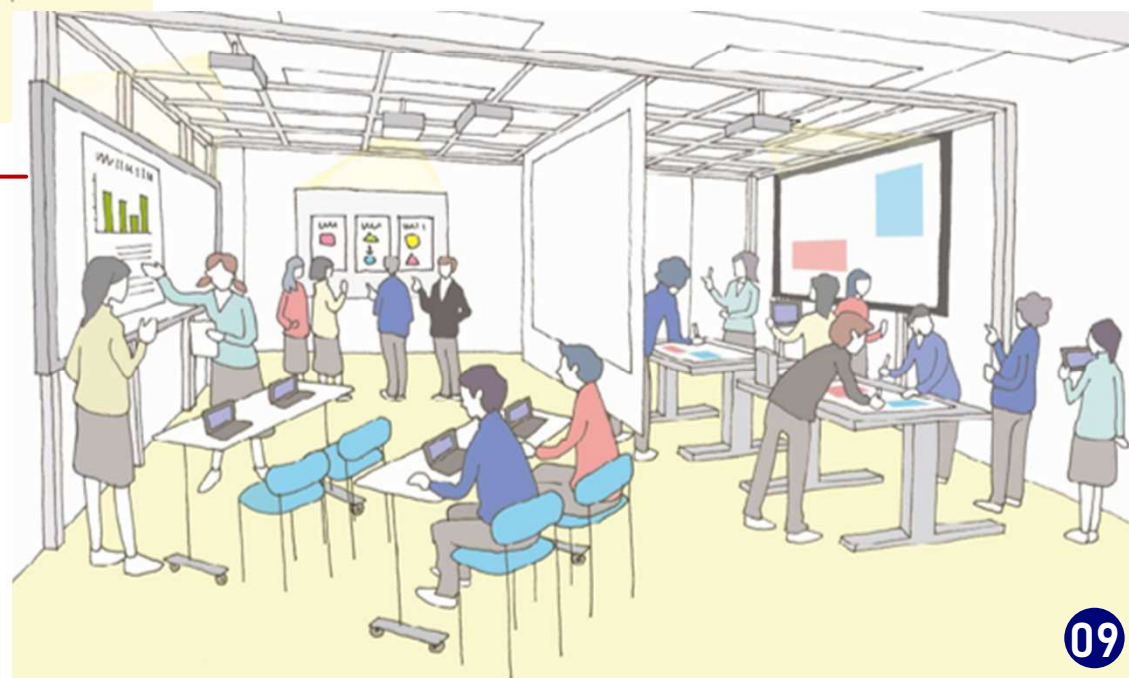
学びの伴走者 Style

教室を回って子どもたちの状況を丁寧に観察し
一人ひとりに合った学びのサポートを行う

子どもの学び

決められた方法ではなく 自分に合った方法 で学ぶ

- ・ 学習ペース ▶ ゆっくり てきぱき じっくり …etc
- ・ 学習教材 ▶ 教科書 学習アプリ 動画 本 …etc
- ・ 学習テーマ ▶ 自分が興味のあるテーマ (自由)
- ・ 学習方法 ▶ 友だちと話し合う 一人で黙々と …etc



学習意欲が喚起され、主体的に学び続ける力が身につく

01 「全員同じ教育」から「個別最適化教育」へ

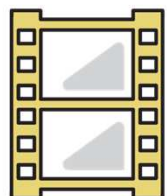
施策 01 自分に合った方法で学ぶスタイルへの転換（多様な学び方の例）

学習テーマ 英語の語学力を伸ばそう



特徴：暗記が苦手な勉強も嫌いなAさん
世界的な歌姫の曲を聴くことが大好き

学び方：ヒット曲集の歌詞を分析して
英単語や英文法を学ぶ



特徴：教科書を読んでも頭に入らないBさん
映画なら何時間でも観ていられる

学び方：ハリウッド映画を英語の音声・字幕で
観て発音やリスニングの力を鍛える

学習テーマ 世界の地理や文化、歴史を学ぼう



特徴：机に向かって勉強するのが嫌いなCさん
一日中好きなサッカーのことを考えたい

学び方：ワールドカップ優勝国の地理や文化、
歴史を調べてその強さの秘密を探る



特徴：昔から知的好奇心が旺盛なDさん
将来の夢は世界一周旅行

学び方：訪れたい国の気候や風土などを調べて
実際に世界一周旅行の計画を立てる

学習テーマ かけ算の概念を理解して使いこなそう



子どもたちの多様な発達段階に応じて
教室を4つの「学習コーナー」に分ける



自分の興味・関心や学習意欲等に応じて
自分で選んだ「学習コーナー」で学ぶ



教室を回り一人ひとりの様子を見ながら
それぞれの状況に応じたサポートを行う

① 教師から教わるコーナー



初歩的な概念を
対面・動画等で
教師から教わる

② トレーニングコーナー

テキストや
アプリ等を使って
計算の練習を積む



③ お店屋さんコーナー



店員または客の
役割に分かれて
かけ算を使う

④ プロジェクトコーナー

算数を応用した
プロジェクトに
グループで取り組む



01 「全員同じ教育」から「個別最適化教育」へ

施策02 評価制度やカリキュラムの見直し

Point ① 評価の「考え方」の見直し

- 特定の時期に、特定の能力がどの程度あるかは人によってバラバラです
→ 評価の「考え方」を根本的に見直します

人と比べてどの程度できるか
(できないか)を測るもの



次にどのように学ぶのがよいか
を考える材料となるもの

Point ② 評価の「基準」の見直し

- 子どもたちはそれぞれスタート地点も違えば、発達のスピードも違います
→ 一人ひとりの絶対的な「達成度」や「成長度」を基準とする評価へ改めます

発達状況の個人差を
基準とする評価



達成度・成長度を
基準とする評価



Point ③ 評価の「方針」の見直し

- 正解のない問題に溢れる実社会で求められるのは、並外れた能力や斬新な発想です
→ 「人と比べてできない点を埋める」から「得意なことを伸ばす」方針に転換します

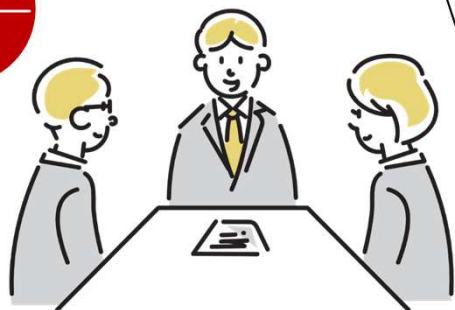
01 「全員同じ教育」から「個別最適化教育」へ

施策02 評価制度やカリキュラムの見直し

Point ④ カリキュラムの見直し

- ・「教科書をカバーする」ためではなく「一人ひとりを伸ばす」ためのカリキュラムへ

Step
01



個別最適化された カリキュラムの作成

子ども・保護者・教師の三者で話し合い、その子の興味・関心や特徴等を踏まえた学習計画(=カリキュラム)を作成

Step
02



一人ひとりに合わせた 学習サポート

教師は自分に合った方法で学ぶ子どもに寄り添って、主体的に学ぶために必要な学習サポート(助言・提案等)を行う

Step
03



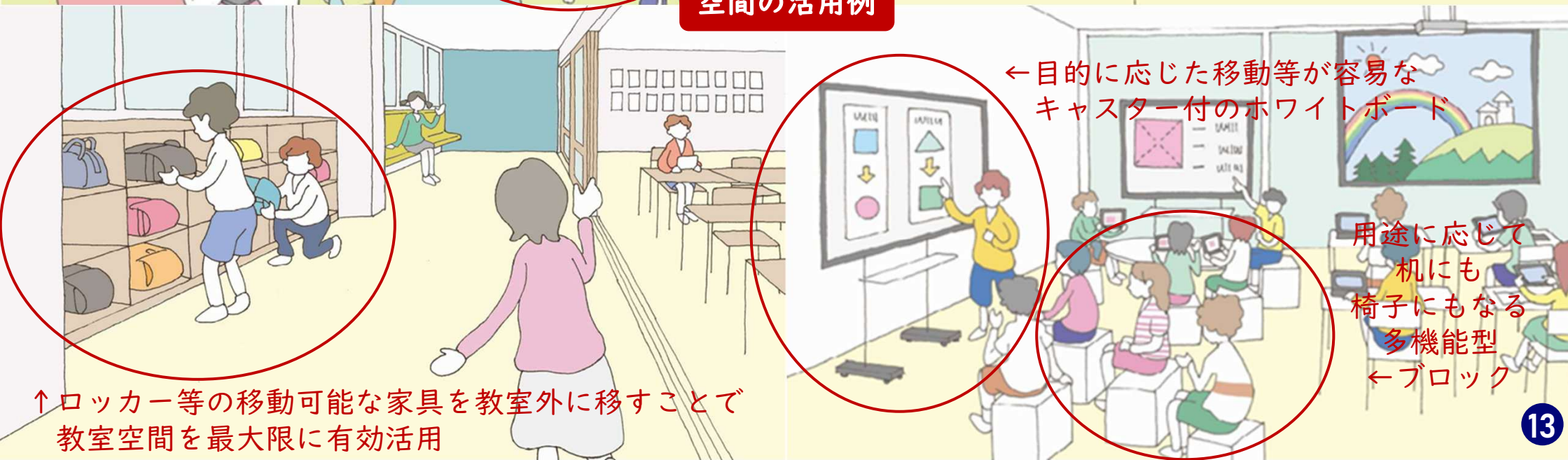
定期的な評価に基く カリキュラムの更新

当初の目標への到達状況や成長度等を定期的に確認した上で、その評価を踏まえて次にどのように学ぶのがよいかを考える

全ての子どもたちが、自分に合った“特別な支援”を必要としています

01 「全員同じ教育」から「個別最適化教育」へ

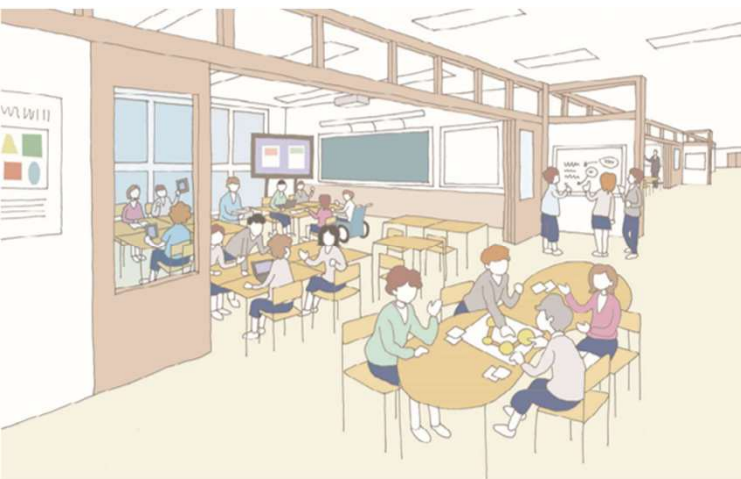
施策03 柔軟で創造的な学習空間づくり (①教室空間)



01 「全員同じ教育」から「個別最適化教育」へ

施策03 柔軟で創造的な学習空間づくり（②学校全体）

・学校全体を学びの空間として捉え直し、設計デザインを刷新します



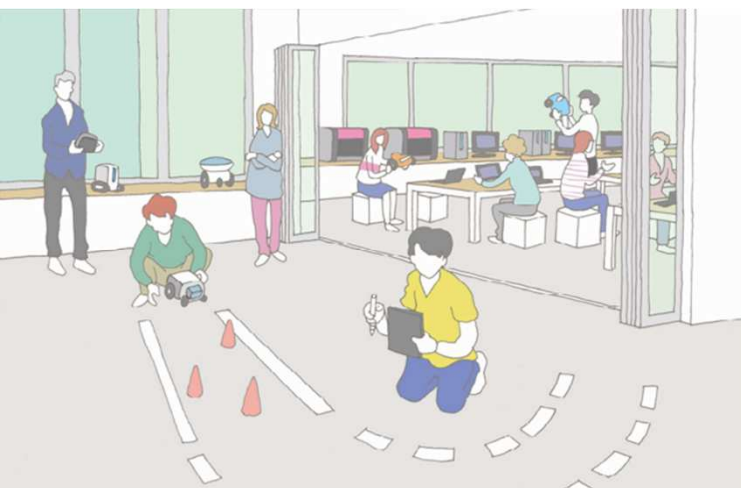
↑隣接する多目的スペースとの連動性・一体性



↑読書・学習・情報のセンターとしての図書館



↑どの教室からも利用しやすい図書館の配置



↑高度な学びを誘発する教室と連続した空間活用



↑発表・表現の場としての階段状の空間の活用



↑インクルーシブ教育を可能とする空間設計

02 “リアルな学び”の充実

施策 01 “自分事としての学び”の充実

- ・私たちが最もよく学ぶのは、自分のしていることに興味を持っていて選ぶことができるとき、自分のしていることに意味があり重要なものであるとき、自分のしていることが“リアル”であり価値があるときです。

Case 01 民主主義の考え方を理解するとともに選挙の仕組みや重要性等について学ぶ

教科書や参考書等を使いながら民主主義の定義や選挙制度の仕組み、投票することの必要性・重要性等の知識を“教科書の中のこと”として学ぶ

自分たちの社会（＝学校）のルール（＝校則）を自分たちで決める選挙を実際に校内で実施

あの候補者の主張には賛成できないけど立候補する勇気ないしどうしよう…



給食を残した生徒への罰則適用を約束します！

対抗馬がないとマズいから立候補するわ！



民主主義の特性や投票の意義等について“自分事”として学ぶ

テーマ

従来の学び

“リアルな学び”の例

自分たちが暮らす街の歴史を知り、街の特色（文化・産業）について学ぶ

Case 02

教科書や参考書等を使いながら周辺との交流を通じた街の発展の経緯や特産品や文化遺産、地場産業等の知識を“教科書の中のこと”として学ぶ

地元の博物館と協力して展示用パネルを作成し、実際に博物館で一般客向けの公開展示を行う



自分たちの作ったパネルが展示されていて嬉しいな…



自分のしていること（学び）に意味を見出し“自分事”として学ぶ

02 “リアルな学び”の充実

施策02 “自分の将来に繋がる学び”の充実

根底にある考え方

1. 「学校」とは、社会で自分らしく生きていくために必要な知識・技能を手に入れるための場所である
2. リアルな社会では、様々な出来事が「教科」に分けられることなく、相互に、かつ複雑に関係し合っている
3. その子が興味を抱く特定の事だけを学んだとしても、広さより深さを追及すればその子の中に学習した内容はしっかりと定着する
(→ 自分が望むように生きていくために必要な知識・技能を十分身につけられる)
4. 子ども一人ひとりの学びたいという気持ちと能力を尊重すれば、子どもたちは大人が与える影響とは関係なく学び続ける
(→ なぜなら、学ぶことそのものがその子の生き方となるから)

“広く浅く”多くのテーマを扱っている「総合的な学習の時間」を大胆に改編し、年間75時間(※)の半分以上を「キャリアデザイン」の時間とします



自分の好きなテーマを決めて
(夢・職業・趣味…etc)



自分で調べたり
仲間と話したり



実際に体験しながら
学ぶ力を身につける



(※) 小学校3年生以上は年間75時間設けられているが、中学校1年生のみ年間50時間設けられている

02 “リアルな学び”の充実

「キャリアデザイン」

の時間の取組例

施策02 “自分の将来に繋がる学び”の充実

テーマ：走るフォームと足の速さの関係性

形式：陸上部のAさんと友人のBさんのペア

夢はオリンピックの金メダリスト スポーツ身体科学に興味がある

方法：世界のトップランナーの走法を動画で研究

実際のAさんの走るフォームをBさんが撮影

プロ陸上チームのコーチの協力の下
フォームチェック&改善を繰り返す

計測結果や研究の成果をまとめる



テーマ：知らないと損する世界のご当地グルメの数々

形式：料理が得意なCさんによる単独の取組

世界各地のご当地グルメに興味津々

方法：世界の料理を動画やインターネットで研究

実際に料理を作りながら製法を習得する

それぞれの地域におけるその料理の
位置付けや歴史等について調べる

デジタル料理本を完成させる



テーマ：自作ロケットはどこまで高く飛べるのか

形式：Dさん・Eさん・Fさんの3人グループ

宇宙に興味がある 理系科目が得意 ものづくりが好き

方法：ロケットの仕組みを書籍や動画等で研究

身近にあるモノを使って設計図を作る

実際にロケットを組み立てて
発射実験と改良を繰り返す

計測結果や研究の成果をまとめる



テーマ：ダメ、ゼッタイ。～いじめがもたらすもの～

形式：7人グループによる一大プロジェクト

脚本や演技に興味のある面々

方法：いじめについて経験談を交えて話し合う

脚本が得意なGさんを中心に台本を作成

演劇部のHさんや俳優志望のIさんから
教わりながら7人で演技の練習を重ねる

いじめを題材とした演劇を披露する



02 “リアルな学び”の充実

施策03 “実社会に繋がる学び”の充実

- 地域人材をはじめとする実社会の多様な資源（ヒト・モノ）と学校を有機的に結びつけるシステムを構築します



教育委員会

プラットフォーム

実社会の多様な資源
(リアル資源)



意見
要望

協力者の開拓
・
授業
づくり
の支援

子どもたちに
伝えたいことや
教えられること
(知識・技能等)

子どもたちが
学びたいことや
身につけたいこと
(知識・技能等)

分析
精査
整理

分析
精査
整理

クラウドシステム

- タグ検索による目的に応じた検索が可能
(校種/学年/科目/単元/学びの要素)
#社会科 #伝統芸能 #モノづくり など
- リアル資源の連絡先等の情報だけでなく
どのような学びを得られるか等も掲載
- 映像や音声、文献等の多様なコンテンツ

意見
要望

ニーズ
の把握

授業や
学びに
利活用

学校



専門家に来てもらえたら
最先端の話が聞けるなあ

実際に
体験しながら
学んでほしい

(利活用の例①)

ゲストティーチャー
による授業

(利活用の例②)

一人ひとりに
合った教材利用

ホンモノに触れる質の高い教育サービスを子どもたちに提供します

03 誰一人取り残さない 学ぶための「居場所」づくり

施策 01 それぞれの子どもの状況に応じた多様な支援

子どもの状況

登校

不登校気味 または
不登校だが在籍校に行ける

不登校かつ
在籍校に行けない

ひきこもり

支援策

未然防止・早期対応

学級以外の居場所

学校以外の居場所

在籍校以外への復帰

社会的自立に向けた支援

Q-Uアンケート

学級における子どもの状況を把握するためのアンケートを小中学校の全学年で実施



いじめや不登校の未然防止&早期発見

全員面談

教員による面談を実施



校内適応指導教室

全中学校に設置されたステップルーム等にて温かな雰囲気の下で個別に支援を実施



学習支援

相談対応

別室登校

保健室等の別室登校



校外適応指導教室

学校の学習のサポートのほか体験活動や専門家によるカウンセリング等の様々な支援を実施



はまかぜ学級
(えがお館)

まつ風学級
(教育センター)

すまいる学級
(東住吉小・東春吉小)

学びの多様化学校

不登校を経験した子どもの実態に配慮して特別に編成された教育課程に基づく教育を行う学校を設置

子どもや保護者のニーズに応える選択肢



学校には戻りたいけど今の学校は嫌だな...

我が家の経済的には公立学校に通ってほしい



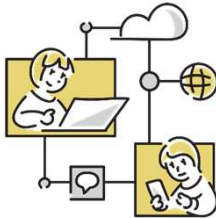
オンラインルーム

オンラインルームを通じて他の子どもやスクールカウンセラー等と交流

いつでも入退室OK

自己紹介

多様な活動



メンタルフレンド

メンタルフレンド(大学生相談員)の派遣



専門スタッフによる連携した支援



教育

教育相談コーディネーター
教育相談の中心的な役割



連携

心理

スクールカウンセラー
カウンセリングによる心のケア

福祉

スクールソーシャルワーカー
福祉面の支援/関係機関との連携

「教育・心理・福祉」の専門スタッフによる連携した支援を実施

ICTを活用した支援

専門スタッフへのタブレット端末配備

気になる子どもへのきめ細かいアウトリーチ支援に活用



動画型デジタル教材による支援

適応指導教室やステップルーム、自宅等で一人ひとりのペースで学習できる動画教材

小1~中3まで全ての内容の学習動画

復習や確認のためのドリル・テスト教材



いつでも、どこでも学ぶことが可能

支援策(個別)

共通の支援策

03 誰一人取り残さない 学ぶための「居場所」づくり

施策02 学びの多様化学校（不登校特例校）の設置

- 不登校を経験した子どもの実態に配慮して特別に編成された教育課程に基く教育を行う学校を設置し（令和7年度開校予定）「別の公立学校に通う」という新たな選択肢をつくります

【参考】学びの多様化学校の教育課程の例 ※ 令和5年4月現在 全国に24校（公立14校／私立10校）存在

Case 01 岐阜市立 草潤中学校

（令和3年4月開校）

「セルフデザイン」を教科として新設し、音楽・美術・家庭科において各生徒がそれぞれテーマを設定して発展的な学習を行い、生徒の個性を伸ばしつつ自己肯定感の育成を目指す



Case 02 八王子市立 高尾山学園小学部・中学部

（平成16年4月開校）

小4～中3の総合的な学習において、教科にとられない個々の関心・意欲に応じた体験的な授業内容（スポーツ系／文化系／ものづくり系等）を週4時間設定



Case 03 京都市立 洛風中学校

（平成16年10月開校）

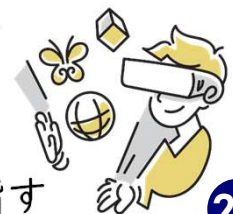
実社会と直結した実践的な体験活動や京都の特性を活かした文化・芸術・ものづくり活動などを行う



Case 04 世田谷区立 世田谷中学校

（令和4年4月開校）

「キャリアデザイン学習」を教科として新設し、各生徒の得意な分野や好きな分野について学びを深めるとともに、個性の伸長と探求心の充実、幅広い視野等の育成を目指す



04 教員が力を発揮できる環境整備

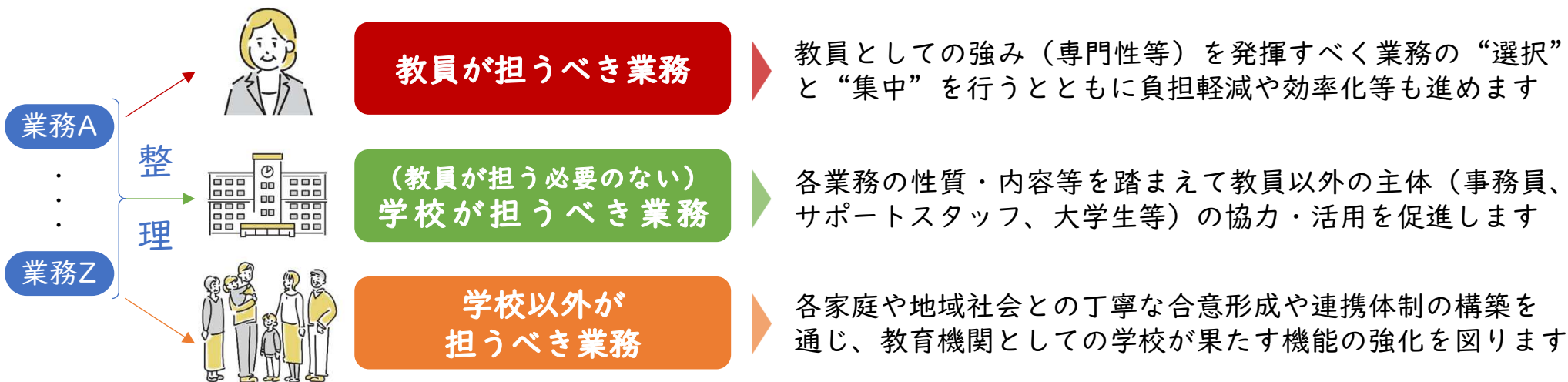
施策 01 教員が担う業務の徹底的な整理・適正化

Step 01 教員が担っている業務全体の洗い出し

➡ 教員が担っている一つひとつの業務の内容（目的・方法等）や所要時間等について洗い出しを行います

Step 02 教育委員会における各業務の徹底的な整理（分類・役割の明確化）

➡ 教員委員会において各業務の教育的意義や費用対効果等を踏まえた整理（分類・役割の明確化）を行います



Step 03 各学校における業務の整理・適正化

➡ 教員委員会が示す枠組みをベースに、各学校において実情等を踏まえた業務の整理・適正化を行います



目の前の子ども一人ひとりの「伴走者」として教員が力を発揮できる環境の実現

➡ 個別最適化教育の実践に必要な知識・技能の修得・研鑽や子どもと向き合うために必要な時間を確保

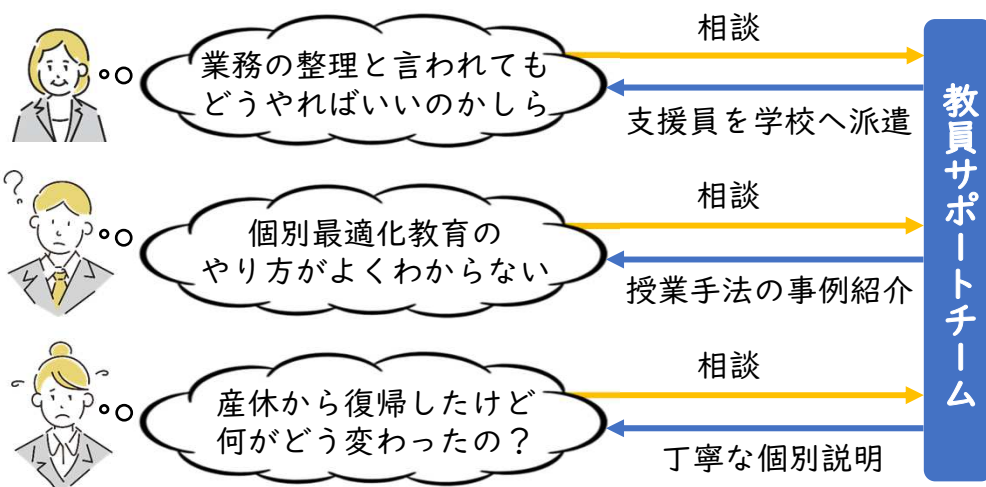
04 教員が力を発揮できる環境整備

施策02 教員の資質・能力の向上・活性化

- 個別最適化教育の実践には、単なる新しい授業手法の導入だけでなく、時代背景に即した深い教育観や目の前の子ども一人ひとりの状況を把握する力（＝学級経営力）が前提となります
- ➡ 教職に携わる一人ひとりのニーズ（＝各段階・状況に応じて求められる知識・技能等の修得・研鑽）に応えるための個別最適な支援を通じて、教員の資質・能力の向上・活性化を図ります

01 教員サポートチームの発足

- 教育委員会内に「教員サポートチーム」を設置（教員経験者を中心として構成）
- ➡ 学校単位・個人単位による相談を受け付け、個別最適な支援を行う



02 教員同士の学び合いの支援

- 公開授業の開催頻度の増加や規模の拡大により個別最適化教育の普及や理解促進を図る
- 教員個人の授業視察等の奨励（可能な限り公務として他校の視察を認めるよう所属長へ通達）



03 知見や情報の共有・フィードバック

各学校・教員への共有・フィードバックの例

- 国内外の先進事例の研究内容
- 個別最適化教育の効果検証結果（研究機関や民間企業等と連携）



子どもたちだけでなく **教員も一人ひとり学び、成長できる環境** をつくります

FAQ（よくある質問）

Q.1

「個別最適化教育」って簡単に言えばどんな教育なの？
「個別指導」と何が違うの？

A.1

「個別最適化教育」とは、一言で表すと「一人ひとりを大切に**する教育**」です。

「子ども一人ひとりに合った学習指導を行う」という授業形態の一つに過ぎない個別指導の概念よりも広く深い概念であり、

- ① 「子どもたちは、一人ひとり違う」という考え方に基き、
- ② **子ども一人ひとりを中心に据えた教育観**（＝「教育とは、子どもたち一人ひとりの潜在能力を最大化させるためのもの」という教育観）の下で、
- ③ 目の前の子どもがこれまでどう育ってきて、今どんなことに興味を抱き、この先どのような道を歩んでいきたいかを踏まえ、**その子の興味・関心や学習意欲等に応じた最適な学び方を取り入れたカリキュラム**をつくり、
- ④ 教科書の中のことではなく自分事として学ぶとともに、自身の将来や実社会に繋がる実感を抱きながら学ぶ、いわゆる“**リアルな学び**”を通じた**深い学び**を実現し、
- ⑤ 他人との比較ではなくその子自身が定めた目標に至るまでの過程や成長度等を評価しながら「次にどのように学ぶのがよいか」を考えていく

ことにより、**子どもたち一人ひとりの主体的に学び続ける意欲や能力を養う**ことこそ、「個別最適化教育」の真髄です。

FAQ（よくある質問）

Q.2 「一人ひとりに合った学び」と言うけれど、学校の先生がそこまで細かく子どものことを見て一人ひとりに合った教育を行うなんて実現可能性の低い夢物語じゃないの？

A.2 確かに今の教員の働き方を前提にすれば、個別最適化教育は非現実的と言われても仕方がないかもしれません。

だからこそ、**公教育の改革は順を追って行う必要がある**のです。

まず最初にすべき改革は、教員の働き方改革です。

教員が担う業務の整理・適正化が実現すれば、教員が子どもたち一人ひとりに向き合う時間やそれぞれに合った学びのサポートを行うために必要な知識・技能を身につける時間を確保することが可能となります。

その上で、時間的・精神的な余裕を持った教員が、目の前の子どもたち一人ひとりの状況をしっかり把握し、それぞれに合った学びの方法を考え、サポートしていくことが必要です。

そうすることによってはじめて、最も重要な子どもたちの学びの改革が実現します。

公教育改革を夢物語で終わらせないためにも、順を追って着実に改革を進めていくことが、今を生きる子どもたち、これから生まれてくる子どもたちのために必要なことです。

FAQ（よくある質問）

Q.3 「個別最適化教育」って具体的にはどのような方法で授業をすればいいの？
「全員一斉授業」は時代遅れでダメってこと？

A.3 「個別最適化教育」への抜本的転換を行う上で非常に大切なことがあります。
それは「**形式論に陥らない**」ということです。

A.1でも述べたとおり「個別最適化教育」とは「一人ひとりを大切にする教育」を指す概念であり、特定の授業スタイルを指す概念ではありません（どの学校にも、どのクラスにも、どの子どもにも最適な特定の授業スタイルは存在しません）。

目の前の子どもが一人ひとり違うように、それぞれに合った学び方（教え方）も違います。大事なことは「目の前の子どもに合った学び方をサポートする」ことであり、別のクラスで行われている一見すると画期的な授業スタイルが、そのまま自分のクラスでも同じ効果を発揮するわけではありません。

同様に「全員一斉授業」がすべからくダメということも決してなく、例えばクラスの全員があるテーマについてほぼ横並びの理解度であるとき、その単元の開始時に考え方の土台となる一定の知識について一斉に教師から伝達する時間を設けることもあるでしょう。

この形式がよい、あの形式がダメという「形式論」に陥るのではなく、教育や学校が何のためにあるのかといった本質を押さえた上で、目の前の子ども一人ひとりを育てるために最適な形で学びをアップデートしていくことが必要です。

FAQ（よくある質問）

Q.4 教員の働き方改革が必要というけれど、結局教員が楽をしたいだけでしょ？
子どもたちのためにやれることは何でもやるのが教員の役割じゃないの？

A.4 「子どもたち一人ひとりの潜在能力を最大化させる」ことが教育の本来の目的であり、教員が果たすべき役割はその教育分野に関する専門知識や培った経験等を活用しながら子どもたちが主体的に学び続ける力を養うために必要なサポートを行うことです。

その役割を果たすために必要な時間（子どもたち一人ひとりと向き合う時間や授業・教材の研究を行う時間など）を十分に確保するためには、今の教員の働き方を根本的に見直す必要があるのです。

今の学校では「子どもたちのため」という大義名分の下で、教員が自身の健康や家庭、生活といったそれぞれ大切なものを犠牲にしながら必死に働いています。たとえ勤務時間外でも保護者の方から電話があれば対応しますし、教員の休憩時間である昼休み中にも何かしらの対応に追われることは珍しくありません。放課後だって部活動の指導以外にも事故等の未然防止のために公園をパトロールして回ることもあります。他にも学校によって様々存在するこうした業務は、どれも子どもたちのために繋がる業務であることは事実です。

しかし、こうした業務を抱えるがゆえに本来最も力を注ぐべき業務（生徒サポートや授業・教材の研究等）に十分な時間的・精神的余裕をもって臨めていないことも事実です。本当に「子どもたちのため」になることは「教員がやれることは何でもすること」ではなく「教員が子どもたち一人ひとりに合った学びをサポートできる環境を整える」ことです。

出典・参考文献等



P.1,9,12,13 の画像（教室の授業風景等）

『新たな時代の学びを実現する学校施設の在り方について』最終報告（文部科学省設置「学校施設の在り方に関する調査研究協力者会議」）
（https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shisetu/044/toushin/1414523_00004.htm）から引用



P.18 の学びの多様化学校（不登校特例校）に関する内容

文部科学省ホームページ「学びの多様化学校（いわゆる不登校特例校）の設置者一覧」
（https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1387004.htm）から引用



クレイトン・クリステンセン,マイケル・ホーン,カーティス・ジョンソン. 教育×破壊的イノベーション 教育現場を抜本的に改革する.
株式会社 翔泳社,2008,273p



デニス・リトキー. 一人ひとりを大切に作る学校. 築地書館株式会社,2022,271p

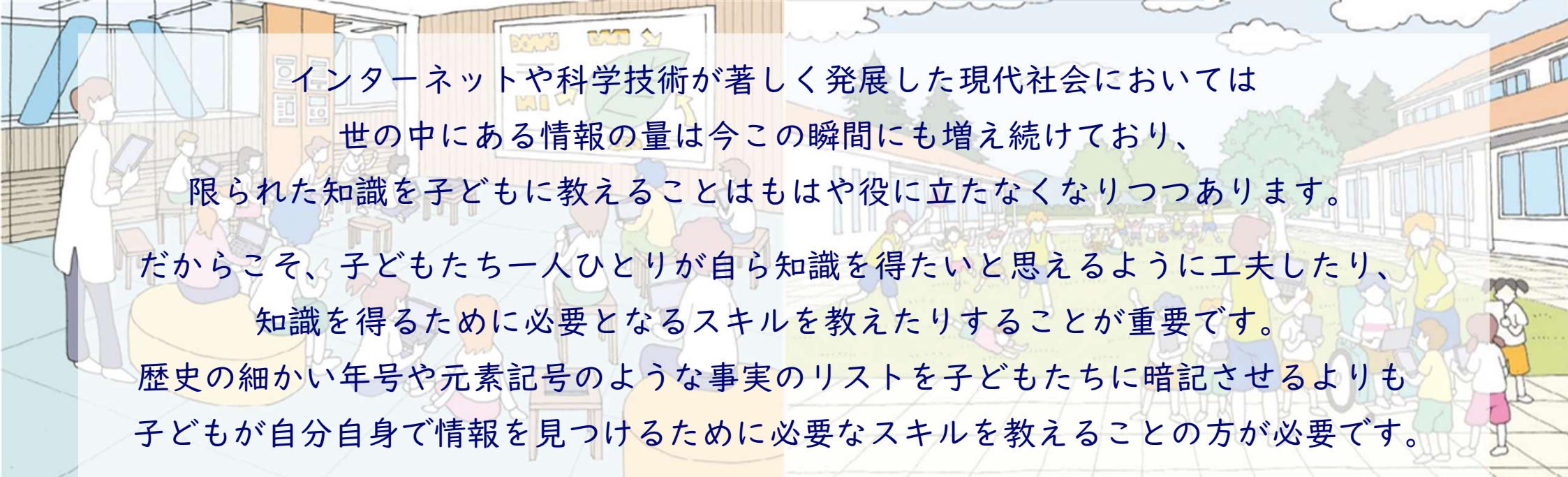


C.A.トムリンソン. ようこそ,一人ひとりをいかす教室へー「違い」を力に変える学び方・教え方ー.
（株）北大路書房,2017,244p

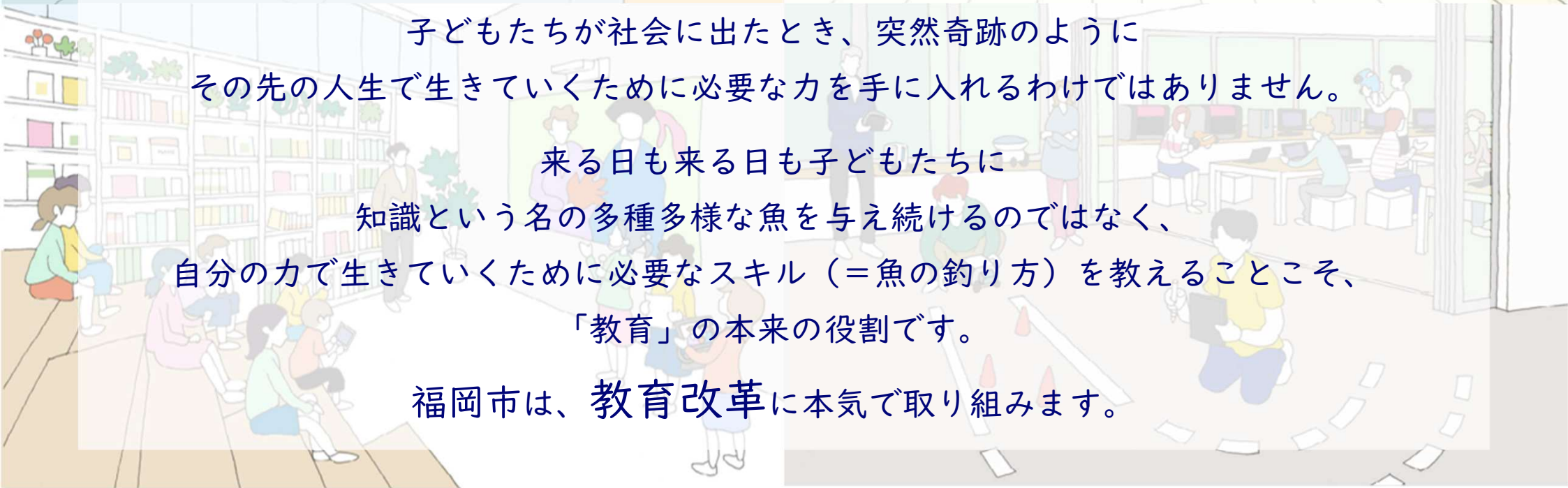


スター・サックシュタイン,キャレン・ターウィリガー. 一斉授業をハックする 学校と社会をつなぐ「学習センター」を教室につくる. 株式会社 新評論,2022,283p





インターネットや科学技術が著しく発展した現代社会においては世の中にある情報の量は今この瞬間にも増え続けており、限られた知識を子どもに教えることはもはや役に立たなくなりつつあります。だからこそ、子どもたち一人ひとりが自ら知識を得たいと思えるように工夫したり、知識を得るために必要となるスキルを教えたりすることが重要です。歴史の細かい年号や元素記号のような事実のリストを子どもたちに暗記させるよりも子どもが自分自身で情報を見つけるために必要なスキルを教えることの方が重要です。



子どもたちが社会に出たとき、突然奇跡のようにその先の人生で生きていくために必要な力を手に入れるわけではありません。

来る日も来る日も子どもたちに知識という名の多種多様な魚を与え続けるのではなく、自分の力で生きていくために必要なスキル（=魚の釣り方）を教えることこそ、「教育」の本来の役割です。

福岡市は、**教育改革**に本気で取り組みます。

Education for You